48

明治女医史の基礎的研究

三崎裕子

一八八五（明治一八）年三月、荻野吟子が医術開業後期試験に合格し、同年一二月に内務省の医籍に登録され近代日本における女医の第一号が誕生した。近代日本の女医の歴史が、ここに開かれたのであった。荻野吟子に続いて翌一八八五（明治一九）年に生沢クノ、さらに翌年には高橋瑞子が試験に合格して医師となった。彼女らが切り開いた道は、さらに多くの女医志願者が踏み固め、吉岡弥生という傑出した女子医学教育のパイオニアを生み出した。吉岡が興した東京女医学校が、一九一二（明治四五）年に東京女子医学専門学校となり、一九二五（大正一四）年まで国内唯一の女子医学教育機関として、多くの女医を輩出したことは周知のとおりである。

明治の女医史については、多くの研究、著述が著されている。ことに荻野吟子、高橋瑞子、吉岡弥生についてはその傑出した能力や波乱万丈の生涯について多く語られている。また彼女らを生み出した当時の医学の制度、私立医学校の変遷についても、先学の多大な業績が存在する。このような中で、今回は明治女医史の点と点を結ぶ作業、すなわち初期の著名な女医以外の、しかしそれぞれの地域に於いて医療活動に邁進した女医達の歴史を振り返って、明治の社会、地域における女医の状況などを考えてみたい。

一八八五（明治一八）年以降、明治末年までに医籍登録された女医の数は一九三七（昭和一二年）に多川澄が調査した数によると二三三名を数える。この人数は多川自身が記しているように確定的なものではないが、明治の女医を調べるにあたり、まず参照すべき資料と思われる。この資料にそってみてみると、このうち出身校がわかるものの人数は一九七名で、東京では済生学舎が六七名、その女子学生拒絶以後設立された東京女医学校三五名、そして済生学者廃校後に設立された東京医学校一三名、日本医学校が四五名（東京医学校との統合後も含む）、その

他二名となっている。大阪では大阪慈恵医院医学校が一四名、関西医学院が一二名である。また外国の女医学校卒業生が八名存在する。

またこの調査には、本籍地も記されている。それによると本籍地の分かるものは一九八名で、ほぼ全国から女医が生まれている。最も多いのが東京府の一一名、以下静岡県一〇名、愛知県九名、岡山県八名、岐阜県七名となっている。もとより完全な調査ではなく、また本籍地であるから、これと女医輩出の直接的な関係を求めることはできないが、当時の新聞の流布あるいは女権運動との関わりなども考慮すると、ある程度の地域的特徴も考え得るのではないかと思われる。

このように全国から東京あるいは大阪に医師を希望する女子学生が集まり、医師となったのであるが、先にみたように明治の女医の圧倒的多数が済生学舎出身者であった。そのため彼女らは後に東京女医学校、女子医専出身者が行ったような同窓会を主体とした活動は行わず、明治末年にすら「女医不要論」が唱えられる中で、ほとんどが個々独立した活動を展開していたと思われる。また一九〇二（明治三五）年に設立された日本女医会も本格的な活動を行うのは東京女医学校が専門学校として認可されてからである。本報告では、多川澄の調査をもとに、明治の女医史研究のもっとも基礎的な作業として、女医個人の活動と女医となった背景などをできる限り調査して報告したい。